

たのしい万葉集: 藤袴(ふじばかま)を詠んだ歌

藤袴(ふじばかま) Fujibakama(Eupatorium japonicum)

キク科の多年草です。秋の七草のひとつとして有名ですね。8月～9月頃に淡い紫色の小さな花が枝の先に集まるように咲きます。大陸から渡ってきたようで、中国では「香草」と呼ばれています。開花時に乾燥させたものを「蘭草」といい、糖尿病に効くといわれています。



藤袴(ふじばかま)を詠んだ歌 Poems including Fujibakama

万葉集には1首だけ、山上憶良の秋の七種(ななくさ)の歌に登場します。

1538: 萩の花尾花葛花なでしこの花をみなへしまた藤袴朝顔の花

よみ Reading

萩の花 尾花(をばな) 葛花(くずはな) なでしこの花をみなへしまた藤袴(ふぢはかま) 朝顔の花

意味 Meaning

そのまんま、秋(あき)の花を読み上げた歌です。秋の七草(七種:ななくさ)として有名です。

万葉集では山上憶良が秋の七草の中に詠みこんだ一首しかありません。

秋の野に 咲きたる花を 指折り(およびをり)
かき数ふれば 七種(ななくさ)の花

卷8の1537 山上憶良

萩の花 尾花 葛花(くずはな) なでしこの花
おみなえし また 藤袴(ふじばかま) 朝顔の花

卷8の1538 旋頭歌 山上憶良
(旋頭歌:五七七 五七七を基本とする)

※二首で一組になっており、朝顔は現在の桔梗とされています。

「指折り(およびをり)」は子供に呼びかける俗称で、「また」は指を折り数えていて5本の指になったところで別の手に変えて数える動作(伊藤博)とされています。

730年の秋、筑紫の国守であった作者(山上憶良)は地方を巡行中、野に遊ぶ子供を見かけ百花繚乱の花の名を教えたくなったのでしょうか。

秋の野に咲いている花 その花をいいか、こうやって指を折って数えてみると
七種の花 そら七種の花があるんだぞ

卷8の1537

一つ萩の花 二つ尾花 三つに葛の花 四つなでしこの花 うんさよう
五つにおみなえし。ほら それにまだあるぞ 六つ藤袴 七つ朝顔の花
うんさよう、これが秋の7種の花なのさ

卷8の1538

訳文(伊藤博:万葉集釋注)

首皇子(おびとのみこ=のちの聖武天皇)の東宮を務めたこともある憶良は当時71歳。秋晴れの野で相好をくずしながら子供たちに教えている様子が目に浮かぶような心温まる歌です。

選ばれた七草のうち藤袴以外はすべて我国原産の植物ですが、遣唐使として中国で何年か過ごした作者は、かの地で見かけた花に親近感を覚え、七種の一つに加えたのかもしれませんが。

ともあれ地味で目立たない藤袴はこの歌のお蔭で1300年を経過した今でも決して忘れ去られることがない植物になりました。



↑濃紫の藤袴

古代の袴 日本歴史図録 柏書房より

藤袴はキク科の多年草で、秋の訪れとともに薄い藤色の花を咲かせます。
小さな筒状の花の形が昔の袴と似ている、あるいは「佩(は)く」すなわち身につけるという意からその名があるとされていますが、花を眺めても今一つピンときません。

「藤袴」が我国の文献に最初に登場するのは日本書紀(允恭天皇の項)で、古くは蘭(らん、らに、アララギ)とよばれていました。
蘭といえば現在はシュンランのような蘭科の植物を思い浮かべますが、そうではなく原産地中国で藤袴の事を蘭とよんでおり、わが国でもそのまま使っていたようです。

乾燥するとラベンダーのような芳香を発するので、衣類に焚き込めたり
匂袋に入れたりしたほか、髪洗い、さらに煎じて利尿、黄疸、通経などに
用いられていた有用の植物です。
(万葉集遊楽より転載)